

サーデグ・ヘダーヤト著 『創造の伝説』

石井 啓一郎* 訳

解題

本稿は、二十世紀イランにおいて、近代ペルシア語散文の礎ともいべき存在である作家サーデグ・ヘダーヤト(1903～51)の三幕からなる人形劇のための脚本である。本作はデビュー当時の1930年に書かれた、彼の初の風刺的、諧謔的作品である。しかし、1946年にフランスのアドリアン・メゾンヌヴ(Adrien Maisonneuve)社からパリで部数限定で刊行されるまで、本作は公にはならず、以後も今日に至るまでイランにおいて公式には流通したことがない。

本稿の訳出にあたっては、米国でヘダーヤト没後五十周年記念(前書きは2001年にパリで書かれたとある)と銘打って『サーデグ・ヘダーヤト未刊作品集』というタイトルで刊行された書をロスアンジェルスの人街(いわゆる「テヘランジェルス」)で入手し、その版を底本としている。本稿底本の出版は「ファルザード出版」とペルシア語で記されており、ペルシア語出版を行なう在米イラン系組織としての活動を展開していることは察せられるものの、その他刊行年や版数、出版地や出版社住所、連絡先等の書誌情報の記載は一切ない。

ご覧いただくとおり、本作はヘダーヤトの作品のなかで、比較的光のあたらない、風刺文学、諧謔文学の範疇に分類されるものであり、セム的な天地創造神話を挑発的、揶揄的に扱った一種の笑劇である。

ヘダーヤトが仏教徒であったというような俗説も、一時は存在したが、現時点では彼が生涯にわたって、ゾロアスター教や仏教に興味を示すことはあっても、結局特定の宗教の信仰を受け容れた形跡を、少なくとも彼に関する評伝や友人知人等の証言、さらに彼の創作から実証的に辿ることはできない。特に彼のゾロアスター教への関心というのは、初期から中期にかけての作品、さらに1936年からのインド・ボンベイ(現ムンバイ)滞在時に現地パールシー教徒コミュニティーとの親交のなかで、イランの中世語であるパハラヴィー語をB・アンクルサリヤに師事した伝記的事実にも顕著であるが、それは純粋に宗教的動機と考えるよりは、カートゥズィアーンが「ロマンティックナショナリズム(Romantic Nationalism)」と言及した同時代の思潮¹⁾に傾倒した若きヘダーヤトが抱いた、イランの文化伝統の一局面への強い関心を反映するものと考えたほうが良い。例えば彼の作品集『明暗』所収の、ゾロアスター教の葬送を題材に一種の幽霊物語として書かれた傑作短篇『連袴(Afaringan)』にみえるように、題材としてのゾロアスター教的終末論の枠組みを作品に取り入れてはいても、それは結局作者独自の厭世観、悲観的人間観、そして虚無的世界観というゾロアスター教の二元論的一神教としての本質的世界観とは、むしろ相反する「死ですら、生の延長上に不可逆的に存在する虚無である」という文学的テーゼを掲げている。そして「現世には、死と逃避の希望があったが、ここ(死後の鳥葬場)には、死すらもない」という趣旨の言葉を登場人物にして言わしめている。(なお、この『連袴』は、拙訳が2001年11月25日季刊『幻想文学』誌62号pp.176-190に収録掲載されている。)

拙訳『創造の伝説』も、基本的にはヘダーヤトの虚無主義、厭世主義、悲観主義といった思想を、

* 文学翻訳者・中近東現代文学(イラン、トルコ)

1) Katouzian, Homa. 2002. *Sadeq Hedayat, the Life and Legend of an Iranian Writer*. London, I.B.Tauris & Co. pp.3-10, 67-71.

裏返した毒々しい笑いのなかに描き出している。イスラーム世界においては、かなり大胆な作品といえるだろう。創造主と腹心の四人の天使が、老い衰えた創造主とパシャ、エフェンディ、ベグ、モッラーなどの世俗宮廷的、あるいは聖職的な称号とともに擬人化され、天地創造という大事業が創造主の誇大妄想的自己愛の下に展開される、計画性のない、それゆえに様々の不条理を孕んだ行為として遂行される様を描く。そして、何より本作第三幕においては、アードムがジュブラーイー・パシャに対して、自らが創造され存在すること自体の非自発性、不随意性を明言する。そこには、しばしばヘダーヤトが創作の淵源のひとつと自認した、西暦十一世紀に生まれの詩人オマル・ハイヤームの様々の詩句、例えば「この世に来ずともよかったなら、私は来なかった」²⁾などの残響が聞こえてくる。

そして周知のとおり、クルアーンのアードムは、悪魔の唆しで禁断の実を口にした罪を許され、再び天界へ還る。しかし、本作は、アードムとハワー（アダムとイブ）は、つがいとなって、「性愛（その表現は抑制的であるが）」のなかに存在の不条理を受忍する一義的な拠りどころを見出し、その性愛を「創造の意味」として認め、地上世界に生きることを意志的に選択する。その利根的、虚無的感情に彩られた結末には、イスラーム的な預言者聖譚とも、またユダヤ・キリスト教的な「墮罪と原罪」を基礎にした世界観とも異なり、ヘダーヤトが生涯に亘って共感してきたフランス実存主義思想などに影響された世界観が提示されている。

そのすべては、とりもなおさず、一神教的な創造神話への辛辣なアンチテーゼである。単に「反イスラーム」であるより、より普遍的に天地創造論に始まり、神的淵源に基づく世界秩序と歴史的・倫理的宗教観を説く一神教的教説に否定的な立場を明確に表明している。

ここではイスラームやユダヤ・キリスト教にみるような唯一神の創造神話というものの不合理性や不条理性というものを挑発するように描いている。例えば、被造物が生存のために弱肉強食の秩序の中に生きる運命や、人口論的な概念のなかで数量化された「死」が、創造のわざとして描かれる。またイスラームにおいて預言者の地位を持つアードムが、猿による創造者の偶発的な真似事で生まれる展開を辿るくだり、或いは老い衰えた創造主の似姿としてのアードムがまるで猿のように醜悪で動物的な容貌をもつ存在として描かれる、といった部分は進化論のパロディックな扱いによる「創造神話」に対する挑発といえる。

ヘダーヤトは常に祖国イランと西欧という異なる価値観の狭間で、そのいずれの世界にも自分の居所を見出すことができぬまま、最後にはパリの寓居で自殺している。彼は様々の民間的な「迷信」からシーア派信仰そのものまでを、民俗学的視座から祖国の民衆文化として、好奇心の対象として積極的に取材調査した一方で、祖国の非科学的、迷信的精神的風土に違和感を覚えて苦しんだ知的精神的遍歴が、しばしば、祖国の宗教的世界観や教義への暴力的、破壊的なまでの表現に走らせたことは想像に難くない。その意味で、こうした彼の、ある意味では自虐的で自己破壊的でもある諧謔表現、ブラックユーモアといった要素は、ヘダーヤト文学を深掘して知るうえで、より着目されてしかるべきであろうと思われる。本訳稿は、これまであまり本邦で光のあたらなかった、ヘダーヤトの「陽気なベシミスト」としての一面に、今後とも焦点を当ててゆくうえでの一助とすべく作成した。

2) オマル・ハイヤーム 2009『ルバーイヤート』（岡田美恵子 編訳）平凡社、p. 37.

「創造の伝説」——三幕の人形芝居——

我らが長老曰く「創造の筆に過ちはなし。過ちを許す無垢なる眼に祝福あれ」と

登場人物

創造主

ジュブラーイール [ガブリエル]・パシャ

ミーカーイール [ミカエル]・エフェンディ

アズラーエール^{モッラー}師

エスラーフィール・ベグ

ムッシュュー・シャイターン [サタン]

アーダム [アダム] 親爺

ハワー [イヴ] 姐さん

天女たち、天人たち、象、駝鳥

第一幕

場面はきらびやかに飾られている。そのなかで、宝石で飾られた玉座に、創造主が長い髭と白髪、の老い衰えた姿で、宝石を縫い付けてゆったりした着物を纏い、厚い眼鏡をかけて、宝石を縫い付けた抱き枕に寄りかかって座している。天女が一人、創造主の頭上に日傘をさしかけている。その傍らには、白い肌の娘が団扇を手にして、彼を扇いでいる。

玉座の両脇を創造主の四人の腹心が固めている。右側にはジュブラーイール・パシャとミーカーイール・エフェンディが、左側にはアズラーエール師とエスラーフィール・ベグがローマの兵士の姿をして、盾、鎖帷子、兜、膝までを覆う靴を身にまとい、長い剣を腰にさげている。背中の翼は萎えたようになっている。アズラーエール師だけは、死人の髑髏のような顔をしている。黒い羽織を肩に掛け剣の代わりに長い鎌を手をしている。

皆、きちっと整列している。その背後では一群の天女たちが、ぴったりと身の丈にあったヴェールを身体に纏い、眉に化粧を施して、この場をじっと眺めている。そして天女のもう一群は、さきの一群の食い入るような視線を、しげしげと見つめ返している。部屋の片隅で、ムッシュュー・シャイターンがその場を眺めている。彼は背が高く、角のような帽子を被り、肩に赤いマントを掛けて太い剣を帯刀している。顎に山羊のような髭を生やし、左右の跳ね上がったような眉毛でこの情景を眺めている。

舞台の真ん中では一群の天女たちと妖精たちが薄い衣をつけて喇叭と太鼓とタンバリンを奏でながら、歌っている。

青草にも曠野にも心躍らず、ああ、心躍らず

花を愛で、眺めるも気が乗らず、ああ、気が乗らず

妖精の一人が、肌着姿で煽情的に腰を振ってみせる。音楽が止むと、彼女はくねくねと創造主

の面前へ行き、蠱惑的な眼差しで彼を見つめる。創造主も裾の長いターバンの腰のところから、小銭を取り出して、彼女が鉢のように逆さにして突き出した鐘に放り込む。楽師達は再び音楽を奏でようとするが、創造主は唐突に手を挙げて、奏楽を止めよとの無言の命令を発し、半身を起す。

創造主（傍らから紙片を取り出して読む）真実は斯くのごとく、この他に如何なるものもない。わしがそこもとらに知らしめんとするは、まさしくこのことじゃ。（唾を呑み込んで）そこもとらも知ろうが、わしも老いぼれて、衰えはしても、この幾日かのうちに、ひと仕事遂げたのじゃ。初めの日に光を、それから大地を、天空を、水を、石を、土塊、その他諸々をこの手で造った。（しばし黙る）わしの望みは、創造を永久に記念し、この力を示すことじゃ。だから、太陽系、そして天道の同属の中にある、この地の面に一群の獣と『アードム』の名をもち、わし自らの似姿に土でこさえた王者を、すべての存在の上に立って統べるべく、任じることに我が意を決めたのじゃ。（一同の万歳の声）そして、わしの望みは、地の表の王者としてのみならず、すべての天使、妖霊と妖精、天女と天人らもその面前にひれ伏し、頭を下げ、そして……

ムッシュー・シャイターン（創造主の言葉を遮って、舞台の真ん中へ進み出る）ならば、私はどうしましょうかな？ならば、一体私は誰だと思いで？

創造主（怒りに顔を紅潮させて）わしに向かって、く、く、口答えか？余計な口を出すでない。息の根を止められるが良いわ！

ムッシュー・シャイターン（微笑みを浮かべて）とんでもありません！私は絶対にアードムに跪いたりしませんって。わたしは火焰から生まれ、そやつは泥から生まれるんですぜ³⁾。

創造主（ジュブラーイール・パシャに）そこなうつけ者を外へつまみ出さんか。

ムッシュー・シャイターン（口をすばめて）そうとなったら、私だって、アードムの父つつあんを誑かしてみせますわ。まあ見てなさいって！（一同ざわめく。ジュブラーイール・パシャはシャイターンの襟を引っ張り、首根っこを捕まえて、部屋から外へと放り出す。外からムッシュー・シャイターンの喚き、呻く声が大きくなる）

創造主（怒りに慥然として、四人の腹心たちに命ずる）おぬしらは此処に留まれ。他の者たちは皆、この場を外すように。皆散開するのじゃ。

（天女も妖精も皆、意気消沈した様子で、大人しく命令に従い、情景から消える。しばし沈黙）

創造主（顔をあげて）ジュブラーイール・パシャ！どう思うかね？例えば今日、天地の創造にこれだけ労をとったあとでは、いささかの憩いを求めようと思うぞ！本当のところ、あのムッシュー・シャイターンのうつけ者めの大それた振る舞い、大目に見過ぎたようじゃ。

ジュブラーイール・パシャ 仰せのとおりでございます。厚かましい奴でございます。

創造主（自分の口髭を噛みながら）しかし、ムッシュー・シャイターンの頑迷ぶりもここに極まれば、わしも明日にでもしかるべき手を打とう。わしはもうシャイターンの顔も見とうない。奴は楽園から放逐させてやる。

ジュブラーイール・パシャ 御意はめでたきものにございます。

創造主 わしは、実行に移す前に、貴公たちに相談にのって貰い、意見を聞かせて欲しかったのだが。（四人の腹心たちはお辞儀をする）

創造主（ジュブラーイール・パシャに）よろしい。では申せ。わしの目論見をどう思う？

3) クルアーン第7章11～12節、同第2章34節、同第17章61～62節参照

ジュブラーイール・パシャ 無論、素晴らしきものと存じます。さりながら、御身が土から造りなされた獣どもは、いかに生きるのをございましょう？

創造主 それはわしも考えた。わしは、あの獣どもが、互いを喰らうがままにしようと思うておる。

ジュブラーイール・パシャ それでは、あれらの種は永続することは叶わず、ほどなく消え去りましょう。王者アダムとて永遠には残りますまい。命令をくだそうにも、ひとりの小作農とて、もはや残らぬのですから。しかも、アダムとて土から造られた身。喰らい、また飲まずば、命をつなぐことは叶いませぬ。

創造主 真じやのう。されば、わしは何とする？

ジュブラーイール・パシャ この獣どもを、子を産み、さらにその子らが麦の種のごとくに、百倍にも殖えるようになさればよいのです。

創造主 おお、素晴らしい。

ジュブラーイール・パシャ さりながら、別の問題がそこにございます。獣どもは途方もない数をなして、地の表を覆いつくしましょう。さすれば、力のあるものは、弱いものを喰らいはしますまいか？ちょうど、力あるものの群れが餌なしに残ってしまうなら、まさに混乱の極みとなりましょう。

創造主 良いことを思い出したぞ！昨日、楽園に居たらな、そこの園丁が邪魔な草を引き抜いておった。それで尋ねたのじゃ。「なにゆえに、そのようなことをするか？」すると、答えて「地が肥えて、花のための養分となるように、でございます」とな。わしらとて、同じことをすれば良いのじゃ。

ジュブラーイール・パシャ なるほど、かの獣どもの天命を限り、誰かひとりを任じて、この様々な種族^{それぞれ}夫々が増殖したら、そのうち一群の命を奪い去って、均衡を乱さぬようにせねばなりませぬな。

創造主 アズラーエール師！

アズラーエール師 御意のままにござります。

創造主 この仕事、そちが引き受けてくれるな？

アズラーエール師 尊いお裾に伏して申します。私めは老いております。申し訳ございません。この仕事に私は向いておりませぬ。

創造主 （怒気をこめて）面妖な話を聞くものじゃ！今日はわしの僕^{しもべ}どもが、皆わしに逆らう。あのムッシュー・シャイターンと思えば、アズラーエール師までもな！わしとしたことが、素性の悪い奴なぞ頼みにしたと言うことか？そんなわしは、なんたる報いを受けることか！

アズラーエール師 （柳のように震えながら）まこと、私めが悪うございました。後生だ、ジュブラーイール・パシャ、私を楽園から追放しないでくれ給え。しかしながら、どうすれば私めは、何の心構えもないまま、命を取り続けましょうか？

創造主 それは、そちの気にすることではない。わしがその口実をそちに与えてやろう。

（アズラーエール師はお辞儀をする。創造主は微笑みを浮かべている）

創造主 （ミーカーイール・エフェンディに）のう、ミーカーイール・エフェンディや。

ミーカーイール・エフェンディ 御用にございましょうか？

創造主 おぬしは知っておろうな。我らがなすべきことはあまりに多い。帳簿と帳面を取るがよい。会計士と書記も加えてそれなりに必要じゃ。そのうえに、勘定の査定もよくやらねばならぬ。実際のところ、コウサルの貯水池がひび割れてしまうたのを、直しておろうか？その費用は一

体いかほどのう？

ミーカーイール・エフェンディ 畏まりました。私めがコウサル貯水池を石灰と石膏で修繕させておりました。まだその支出がいかに定かではございません。

創造主 わしの仕事場をきれいに片付けるよう計らうのじゃ。それから道具をすべて準備せい。シャイターンめが何を思おうが、明日には仕事に手をつけるのじゃ。そちの指図で、五千万の粘土と、五千万の水桶を、五千万の搬送器と、五千万の熊手と、五千万の梯子と、五千万のローラーと、五千万の手斧と、五千万の鋸と、五千万の丸太と、五千万の鶴嘴と、五千万の鍬と、五千万の篩を、用意させい。

ミーカーイール・エフェンディ 畏まりました。実を申しますと、エメラルドの宮殿のアーチにもひび割れがございますが。

創造主 またわしらに出費をかけると申すか。

ミーカーイール・エフェンディ 申し訳ありませんでした。

創造主 天国を早う、水撒きをして綺麗にさせておけ。わしは、天使をひとり、わしの似姿のままに創ってしもうたのが、残念じゃ。わしはその天使を楽園に遣わし、そこで楽しく暮らすようにしようと思う。地上へ送って、動物たちのなかで暮らせというには忍びない。それでも、おぬしらは、その天使に礼を尽くさねばならぬぞ。

四人（皆、お辞儀をする）畏まりました。

創造主 エスラーフィール・ベグ。そちは何も言わぬのう。

エスラーフィール・ベグ 然様でございます。

創造主 そちにもアードム・アードガーの護り神を申し付けよう。そちは、アードムをシャイターンが誑かすことのないように、よく見張るのじゃ。もし彼の身に危険が迫ったなら、そちの喇叭を吹き鳴らすのじゃ。

エスラーフィール・ベグ 畏まりました。私めは御身の僕、常にお仕えしております。

創造主 アッラーが嘉したまわんことを。そちは良いことを申すのう。

エスラーフィール・ベグ 私めは、恩賜の糧で育ち、大君の忠実なる僕でございます。

創造主 では、この仕事、そちは遂げられるな。

エスラーフィール・ベグ 御意は御意のままであること、申し述べます。一昨日、見目好い天人が一人、天女の一人といちゃついていたら、それをお耳に入れずにはおきませんでした。そして、御身は彼奴らをともども地獄の炊事場へ放り出されませんでしたか？

創造主 わしは、そちら皆に満足じゃ。しかし、そちらの誰とて、ジュブラーイール・パシャに及ぶものは居らぬ。さて、わしは彼と二人で話がある。わしはずっとジュブラーイール・パシャと親しくしておった。ずっと、ずっと。わしらは若かりし日々を、共に過ごしてきた。哀しい哉。それは、もう過ぎたこと！あの頃は良かった。ああ、青春よ！

（ジュブラーイール・パシャは子供染みて、拗ねたような様子で、翼を動かしている。ミーカーイール・エフェンディは片足を片翼に寄せてうとうとしている）

創造主 ジュブラーイール・パシャ。

ジュブラーイール・パシャ 御意でございます。

創造主 わしは、そちを頼りにしておるぞ。わしの業のすべてを見守るのじゃ。ここに残れ。（エスラーフィール・ベグ、ミーカーイール・エフェンディ、アズラーエル師に合図をする）そちたちは、行くがよい。ジュブラーイール・パシャは残るのじゃ。

（ジュブラーイール・パシャは残っている。他の三人は、均衡を崩して転びながら、外へ出てゆく）

創造主 さあ、わしらだけじゃ。行って、わしに牛乳粥をひと皿持ってきてくれぬか。まったく、歳などとるのは情けないもので……

（ジュブラーイール・パシャは部屋を出る。創造主は咳をすると、眼を閉じる。右と左の手の人差し指の先を合わせてみる。ジュブラーイール・パシャは小さな鍋を持って、入ってくる。そして、小鍋から米と牛乳でつくった粥を皿に掬い、創造主に）

創造主 （微笑みながら）そちの居らぬ間に、占ってみたぞ。幸先良いことじゃて。

ジュブラーイール・パシャ 験の悪いことなど何がございましょう。創造主の御意にございます。

（創造主は牛乳粥をびちゃびちゃ音を立てながら食す）

ジュブラーイール・パシャ お待ちください。今、前掛けをお持ちします。

（創造主は笑って、牛乳粥をぶっと吹き出し、顎鬚にこびりつく。ジュブラーイール・パシャは押し殺したような笑い声をだしている）

創造主 我らが足で大地に立とうとは、何かの茶番のようじゃな！そのときは、一緒に座って、天下を見渡し、牛乳粥を食して、高らかに笑おうぞ。

（幕）

幕の向こう側から高笑いが聞こえる。そして静かになる。

第 二 幕

広い仕事場が見える。部屋の幅だけある、狭いテーブルのうえに、物理的あるいは化学的な操作のための機器類、顕微鏡、天秤、電動工具、コンパス、三角定規、木材と木板、色水の入った一群の大きな広口瓶が置いてある。暖炉には油脂灯が点っている。仕事場の前には、陶土が水を含んだ状態である。鋺、篩、ツルハシなどが床に乱雑に散らかっている。テーブルの脇には、安楽椅子が一つ、大きな鏡の前に置かれている。

創造主は両袖を捲り上げている。青い長衣の裾を腰に結わえているが、次第にそれは足まですり落ちてゆく。ジュブラーイール・パシャは手にシャベルを持って、粘土を固めている。

創造主 （ジュブラーイール・パシャに）その土の山を、そちの脇から真ん中へ持ってきてはくれんか。

ジュブラーイール・パシャ 畏まりました。

（骨格の形に円筒に組んだ陶土の塊を、部屋の真ん中に引き摺ってゆき、息を切らせている。それから着衣の袖で額の汗を拭う）

創造主 わしのせいで疲れたか？

ジュブラーイール・パシャ いえ、何ということもございません。

創造主 わしも疲れておる。そちも知ってのとおり、仕事に精を出して今日で六日じゃ。四日目は植物を創った。五日目は動物を。そして今日は余分に残った土で「象」を創るのじゃ。これは、巨大な獣でな。頭がここ、脚があそこじゃ。（指し示して）あの土から、アダムを創る良質の土は取り分けてある。言ったとおり、わしはなるだけ沢山、残り物の土を使って、わしは「象」を創るのじゃ。その後で、アダムももう半ば出来ているのだが、完成させよう。その時が七日目じゃ。我らは座して、創造の世界を一望にしよう。

ジュブラーイール・パシャ つまるところ、これらを創ることは容易いことでありますな。畏れながら、一言申しあげてもうよろしゅうございますか？

創造主 申せ。

ジュブラーイール・パシャ ご記憶のとおり、私どもは先ず、様々の黴菌やら虫を創ることから、着手致しましたが、アーダムを創るよりも、断然難しうございました。このようなものどもを創るには、どれほどの面妖な機材を駆使なさりましたことか。しかしながら、これら他のものは、より容易いものでございます。

創造主 ふむ。それはわしが悪かったな。わしは、そちに陶工の練達の技芸を教えておらなんだ。そちは、秘められたものが見えぬくせに、この創造者の工房を批判するのか？そちとても、頭のほどなど知れたものじゃな。わしが、まず細菌や虫を創ったのは、わしの手を慣らすためだったというに。そちは、人間を創ろうということは、それほど簡単なことだと思っておったか？そちは、わしが一時間前に鏡の前で、猿どもをわしに似せて創っておったのを、見ておらぬ訳ではなからうに。それはアーダムを創るためにわしの手慣らしをしておったというに。

ジュブラーイール・パシャ されば、私めが何をすればよろしいか、お申し付けください。

創造主 部屋の隅を行って、あの樹の切り株を四つ持って参れ。

ジュブラーイール・パシャ 象の脚にするのでございますな？

創造主 しかと然様じゃ。そちも分ってきたのう！

（ジュブラーイール・パシャは行って、樹の切り株を持ってくる。そして土のなかに立ち尽くす）

創造主 さあ、この土の四隅にそれを持ってきて、置くのじゃ。（土の塊を示す）こいつの頭も持って来い。頸に接着するのじゃ。あの土を円筒に丸めたものを（示して言う）くれるかな。

（ジュブラーイール・パシャは指図のままに動く）

創造主 （笑う）ジュブラーイール・パシャ。良いことを思いついたぞ。暖炉の、あの管も持ってこい。そして、この頭に差し込んでおけ。もう部屋は暖かいから、暖炉の必要はない。それから、食盆のなかから二枚の薄焼きパンも持ってきて、頭の両側に貼り付けるのじゃ。無論分っておろうが、動物の身体の器官は対称でなくてはならん。そして、一つだけしかない器官は、身体の中央になくなくてはならぬ。

ジュブラーイール・パシャ 仰せのままにございます。

（創造主は箏笛をテーブルの上から取り上げる。それで象の尾の下から息を吹き込む。ジュブラーイール・パシャも腰に手をあてて、その情景を眺めている。不意に土の塊が、むくむくと動き出す。創造主は箏笛を外して、後ずさりする。象は鼻を動かす。そしてその場で跳ねると、激しい吼え声をあげる。創造主は一掴みのうまごやしを手に握って、象の前にゆく。象はまた吼えると、うまごやしを鼻で掴み取り、宙に放り出す。創造主は蒼ざめて後ずさりする）

創造主 象使いをここへ遣わせよ。そして象を輿に乗せて、地上へと送るのじゃ。

（象使いがつるはしをもって、象にまたがり仕事場から退出する。創造主は嘆息して、安楽椅子 Rocking Chair に座り込み、それから煙草を取り出して、煙管を用意すると、靴底でマッチを擦って火をつける）

創造主 なあジュブラーイールや？

ジュブラーイール・パシャ 何でございましょうか。

創造主 わしがどれほど疲れたか分るまいな。でも、わしはこのまま、アーダムを腰のすわらぬ状態のままにして、仕事が中途半端になることを怖れておる。こんなに老いぼれて、何たる熱望

を覚えることか。さあ、なるべく早くアーダムを完成させよう。さすれば、わしは心安んじて、寝床に天女を侍らせて、両足を揉みほぐしてもらおう。そちは、わしに牛乳粥をくれような。そして、地上を見渡して、我らで笑おうではないか。そうじゃな？ ジュブラーイール・パシャ。この蠅どもを追い払ってくれんか。こんなしつこい生き物をわしは創ってしまったとはな。こやつら、己の創造主に賛美と感謝を捧げるところか、小突きまわすとは。鬱陶しいものじゃ。
ジュブラーイール・パシャ 畏れながら、水をお顔にひと掛けなさってください。お髭に牛乳粥がべっとりと付いております。蠅どもは、甘い匂いに寄って来たのでございます。

(ジュブラーイール・パシャはボール紙を一片取り上げて、その埃を払ってから、蠅を追い払う)
創造主 さて、姿見を持ってきてくれるか。それから戸板のうえに、わしが水になじませておいた土を持ってくるのじゃ。

(ジュブラーイール・パシャは、上にアーダムの姿にこねられ、湿った土を乗せた戸板を持ってくる)
創造主 (眼鏡を拭いて、訝しげに見つめてから、怒って言う) ジュブラーイール？

ジュブラーイール・パシャ 何でございましょうか。

創造主 こら、わしのやることに、何を勝手なことをしよったのじゃ？ そちの分限でわしに張り合おうと申すか？

ジュブラーイール・パシャ 失礼いたしました。

創造主 一体この土で、誰がわしの姿にアーダムを作ったのじゃ？

ジュブラーイール・パシャ 何と申しあげたものでしょう？

創造主 こら下郎め！ 本当のことを申せ、さもなくばどうなるか、分っておろう！

ジュブラーイール・パシャ (手で自分の額を打って) なるほど！ 思い出してございます。昨日、御身は椅子にかけてお休みでございました。私めが部屋に入りましたところが、猿めが戯れに御身の真似ごとを致しておりました。鑊を取り出しておまして、己の姿を姿見に映して眺めておまして、この土を一所懸命にこねくりまわしておりました。私めを見ましたら、一目散に逃げてゆきました。

創造主 猿め、悪くないではないか。わしらの仕事を先んじてやりおった。わしと張り合ったりせんように、あの猿めの手をへし折ってやらんと。それで差し出たまねは出来ぬわな。さあ、仕事に励まんといかんな。

(創造主は鑊で擦っては、息を吹きかけては粉を払う)

ジュブラーイール・パシャ 神様、猿の親父っさんをお許しくださいますように。我らの仕事を簡単にしてくれたって訳だ。

創造主 (笑って) 葦笛を持ってまいれ。

(絹の手布を取り出すと、アーダムの顔にそれを投げかける。そしてぶつぶつと呪文を唱えている。
ジュブラーイール・パシャは葦笛を持ってくる。創造主はそれを受け取って、アーダムに息を吹きかける。アーダムは身体を揺する。両眼が開く。天使たちと妖精たちは、皆で工房の前景に押し寄せて、口々に万歳を高らかに叫ぶ。)

創造主 (尊大な態度で微笑みを浮かべる) アーダムよ！

(アーダム親爺は跳ねて、唸り声をあげる)

創造主 (進み出て) アーダム！ 近こう寄れ。

アーダム親爺 腹へった、腹へった。(両手で自分の腹を叩く)

創造主 わしの前に来るのじゃ。わしの前に跪かぬか。まずは、そちの顔と手を洗わせよう。髪を

整えさせよう。それから、そちを楽園へ遣わすことにする。美味しいものを、たとえ食するがよい。しかし、決して麦だけは食べるでないぞ⁴⁾。もし麦を食べてしまうと、我らが絆は断ち切れよう。わしは、そちを楽園から追い出すようにせねばならぬ。

(アーダム親爺は恐ろしい面相で、身体は毛むくじゃらで、両眼はぎょろりと見開いている。両掌で頭を打っては、髪を拳でわしづかみにしている)

アーダム親爺 わしや、腹へった。わしや、腹ぺこだあ。(指で自分の腹を指し示す)

(幕)

幕の向こうから、アーダム親爺の泣き叫び、喚く声が大きく聞こえる。「わしや、腹ぺこだあ！」

第 三 幕

地上の風景である。森が遠景に見え、山があり、黒くもがひと塊空に浮かんでいる。そして月が雲の後ろから、覗いているのが見える。鳥たちと草食獣たちが騒ぐ声が陰鬱に聞こえてくる。途方もない巨体をもった動物たちが、木々の上から姿を見せる。アーダム親爺は大柄な猿たちの姿をして、毛むくじゃらで色黒、大きな腹と落ち着きのない眼つきで、髪は乱れている。大きな桑の木の下で、ハワー姐さんの脇に立っている。ハワー姐さんは髪が長く、地面まで引き摺っている。背は低く、大きな頭で、紅い頬をして口が大きく、乳房と尻が出っ張っている。呆然と立ち尽くしている。

ハワー姐さん (アーダム親爺の方へ向き直って) もう嫌！あの猿を見たでしょ。からかって、私の真似をしたでしょ？(地面に座り込んで、泣きじゃくる)

(アーダム親爺は桑の枝を揺する。何粒か桑の実が地面に落ちる。ハワー姐さんは目をこすると、桑の実を集めて、急いでそれを頬張る。アーダム親爺はハワー姐さんに物欲しげな視線を向ける。そして微笑を浮かべる)

ハワー姐さん 何て美味しいの！楽園にはこの実は無かったわね。

アーダム親爺 楽園では、穏やかに過ごせたなあ。思い出さだろう。ムッシュー・シャイターンめ。お前の親父に災いあれだ。俺たちを騙しやがって。

(ハワー姐さんは、口いっぱい埃まみれの桑の実を頬張って、首を振る)

アーダム親爺 楽園では、梨の樹を指差すだけで良かったものだ。梨の実がもげて、そのまま俺たちの口に入ってきたもんだ。ここでは、俺たちが食べ物を求めて走り回らんといい。それも、他の動物たちと奪い合いときた。シャイターンめが、呪われろ！

(このとき、巨大な駝鳥が悠然と姿を現す)

ハワー姐さん (立ち上がる) 嫌だわ！あれはまた何なの？何て姿をしているのかしら！

アーダム親爺 あれは駝鳥さ。

ハワー姐さん 駝鳥、駝鳥、私怖いわ。

(アーダム親爺は手を伸ばして、砂岩の欠片を投げつける。しかし駝鳥はそれも呑み込んでしまう)

4) クルアーン第2章35節、同7章19～25節、同20章120～121節。なお原文は訳稿のとおり gadom (麦) となっているが、クルアーンにおいては「不死の木 (sajarat-l-khuld)」のような表現上のヴァリエーションはあるものの、基本的に sajara (木) と言及され、具体的な植物の種別を特定する表現はない。キリスト教での「リンゴ」に相当し、一般にイランでは「麦」であると信じられている。

ハワー姐さん 見たでしょう。石も食べてしまったわ。創造主様は、なんという災いを私たちにもたらされたのかしら。私たちのことを食べてしまうわよ。早く、樹の上に逃げましょう。

(アーダム親爺は、ハワー姐さんを、急いで抱き上げ、腕に抱えて桑の樹に昇る)

ハワー姐さん 楽園は良かった、って私言わなかったかしら？ねえ、ジュブラーイールを呼ぶわ。そして創造主様にお赦しをお願いするわ。私たちを楽園に帰してくださいってね。さもないければ、ジュブラーイール・パシャにお願いして、楽園の戸口を示してくださいって。創造主様がお赦しくださらなくても、どなた様かにお取り成しを願って、私たちは楽園にこっそり潜り込むのよ。

アーダム親爺 (両手を口の脇に添えて叫ぶ) おおい、ジュブラーイール、おおい。

(すべての獣たちが静まり返る)

(翼を開いたジュブラーイール・パシャが遣ってきて、前景に進み出る。挨拶する。アーダムとハワーは樹から下りてくる)

アーダム親爺 ジュブラーイールさん。もしご面倒なら、ほんとに申し訳ないんですが、お裾に縋って申しますわい。わしらのために、お力添えくださいな。創造主様に宜しくお取り成しくださいな。わたしや、お赦し願いたいんです。わしらを、楽園へ戻しておくんなましよ。わしら悪くなかったんです。ムッシュー・シャイターンにわしら騙されたんですわ。あいつ、麦を食えって、これは美味いぞって、それでわしらも食っちゃったんです。わたしや、創造主様がムッシュー・シャイターンにお怒りだったなんて、とんと知らなんだ。もう、わしら、こんなところに生きられませんか。ハワーさんなんて、夕べ一睡もできない有様でしたんで。生きてるって、こんなことを言うんじゃないや。それとも何ですか？まさか創造主様は、徒然のなぐさみに、わしらを創りなされたんですかね。わしら、創造主様に、まさかわしらを創ってくださいなんて、そんな指図も、お願いもしてなかったでしょ？わしらを、一体何で地上になんて、送りなされたんですか？

ジュブラーイール・パシャ 落ち着きなさい。創造主様とて、御自らの所業を悔いていらっしゃる。昨晩は私の傍らで、涙をぼろぼろこぼして泣いていらした。今日とて、すっかり気が塞いでいなさる。ご機嫌斜めで、お怒りだ。誰も創造主様の面前に進み出ようとは、敢えてしない。朝には、百万に達するばかりの罵りのお言葉を、私も承ったよ。すべては、お前たちのせいなのだぞ。麦など食べたりしなければ、こんなことにはならなかったというに。

ハワー姐さん ジュブラーイールさん。夕べ、アーダムと一緒にあの洞窟のなかへ入ってみたんです(指差す)。そうしたら、あの獣たちが吼えていたんです。私怖かったんです。今日はアーダムに言いました。まるであの猿たちみたいに、椰子の樹の上に、私たちの巣をつくろうと上ったんです。創造主様に言ってくださいな。私たちにトルコ石の宮殿を造ってくださいましな、って。あの楽園にあるようなものを。

アーダム親爺 (ジュブラーイール・パシャに向かって) あなたのお慈悲にかけて、わしらはあなたの僕ですわ。わしらのために、何とかしてやってくださるんですか。わしはどうでも、それでもハワーのために、何とかしてやってもらえませんか。

ジュブラーイール・パシャ 私は何をする立場にもないがな。

アーダム親爺 (ジュブラーイール・パシャに向かって) なら、創造主様に言ってくんなさい。わしらを初めのように、土に戻してくんなせえって。わしら、あの方にわしらを創り出して、そんで御力のひけらかしなんか、やってくれって、頼んでなんざいませんでしたぜ。もう済んだこと

なんだけど、こうなっちゃ、しょうがないじゃないですか。なら、わしらの種族を根絶やしに
しなさったらいい。

ジュブライール・パシャ 分っているのか？創造主様のお言葉は絶対だ。もし、お前の言葉に耳
を傾けようものなら、明日には地上のありとあらゆる動物が、大声で陳情にくるわな。

ハワー姐さん （何か言わんとしたが押し黙り、アードムを冷やかに咎めるような目で見ると）まだ、罰当た
りなことを言うつもりかしら？ジュブライールさん、私は貴方を頼りにしていますの。決し
て、創造主様には言わないでくださいね。アードムが悪うございました。

ジュブライール・パシャ よろしい！創造主様は、もうこんなことなら、いくらでも耳にしてお
られる。まさに天地創造の業に手を付けなされたそのときから、創造主様は何を言われるか、
覚悟は決めていらしたよ。

ハワー姐さん ジュブライールさん。貴方は善き人、いいえ、とても善き天使でいらっしゃいま
す。貴方に、ひとこと申しあげます。今、私とアードムが立っておりまして、そこに駝鳥が
通りました。砂岩の欠片を、どれほど大きなものであっても、この鳥めは貪りました。

ジュブライール・パシャ また、そちたちは、創造主様に恩知らずを申すか。

アードム親爺 現にわしらは、こうして居るんだから、本当のところをわしらに言うてくだされ。
いったい、なんだって創造主様は、なんの覚悟を決めて、こんな動物たちなんかお創りになっ
たんで？

（ジュブライール・パシャは指を唇に当てて言う）

ジュブライール・パシャ 誰にも言うでないぞ。ここだけの話だ。創造主様自身もご存じない。
そして後悔もなされておる。これらを創って、腰を下ろして、牛乳粥を食し、あたりを見渡し、
笑おうというためだったのだよ。

ハワー姐さん アードムの言うことを聞かないでください。ここにいるのでも、私たちには、良い
ことです。楽園への帰還は望みません。あちらでは、心安んじて過ごすことはできませんでした。
いつでもエスラーフィール・ベグが、あの見苦しい姿で、まるで私たちの鼻毛みたいに、いつ
もつきまとして。それで私たちが一緒に話していたり、不真面目に戯れていたりで、すねば、
喇叭を吹いて、私たちが楽しく過ごすことを許しませんでした。そうだったわね、アードム？

ジュブライール・パシャ 少しずつ慣れてきているな、お前たち。お前たちときたら、楽園でも
満足しなかった。ここでも満足しない。どうあっても満足なんてしないだろうな。

アードム親爺 わしの欲びのすべては、このハワーだ。

ハワー姐さん 私も同じよ。私だって、あなたのことが好き。

（ジュブライール・パシャはハワー姐さんの身体を、頭から足まで見つめる。ハワーは恥らって
困惑したように、桑の樹から葉を一枚摘んで、前を隠す）

ジュブライール・パシャ お前たちが人生に幸せを得るために、創造主様はお前たちに「子供」
を授けようとなさっている。

ハワー姐さん 子供！子供！「子供」って何なの？

ジュブライール・パシャ 「子供」というのは、お前たちにそっくりで、小さなアードム、というか、
小さなハワーといったところだ。成長して大きくなり、お前たち二人は、その「子供」のため
に苦勞するし、その「子供」に愛情を注ぐだろう。そして、その「子供」のために、お前たち
は人生に対して、愛着を覚えることになるだろうよ。

アードム親爺 またこれだ。こんどはどういうおためごかしだい。創造主様は、こうしてわしらを

創った。それ以上のことは何もなかった。それで、さらに別の不運を寄越そうって訳かね？まさか、わしに何の罪があるってんだ。

ハワー姐さん ねえ、創造主様はあなたより、よく分っていらっしゃる。ジュブラーイールさん、正しいことを仰るね。創造主様に、私から宜しく言ってくださいな。創造主様は正しいことを仰るのよ。私たちが楽園を追われてからまだ、さほど時間は経っていないでしょう。(アーダムに指し示す) あなたは、私を置いて、あっちへ、こっちへと行くでしょう。そして、私は独りで残るのよ。私は、自分の傍らに誰かが居て欲しい、そしてその誰かを好きでいたい。駝鳥は私と言葉が通じない。私は、駝鳥のことなんか好きじゃないわ。

アーダム親爺 結構なことだ。お前は今日、駝鳥の名前を覚えたな。

(このとき、天の高みから『ジュブラーイール、おい！ジュブラーイール、おい！おい』という声がする)

ジュブラーイール・パシャ まだ創造主様が、待ちきれなくなっていらっしゃるか。それとも、牛乳粥を御所望か、それとも私とおはじき遊びでもしたいのか。それで、また遊びの決まりを勝手に変えるからなあ。やれやれ、何てことだろう！まずは神様のご加護がお前たちにあるように。何かあるときは、私を呼ぶが良いぞ。(宙に舞い上がり、そのまま行ってしまう)

アーダム親爺 (ハワー姐さんに) まったくお喋りな奴だな！何でも、わしが思ったとおりには、お前はさせてくれなんだ！何たる連れ合いを、創造主様はお造りくださったものか！わしが独りにならんように、わしの左の肋骨からお前は創られたのだろうが。

ハワー姐さん へえ、嘘ばかり！あなたの言ったことを、私が信じたと思っているの？私を好きじゃないっていうなら、この際ジュブラーイール・パシャに言いましょよ。もしも、創造主様のお計らいで、最初から私が子供と一緒にだったとすれば、あなたなんかを、仕方なしに頼りにする必要も無かったんだから。左の肋骨のことなんかで、あなたは私を責めるのね？なら、結構よ。創造主様が、あなたの肋骨なんて駝鳥の前に投げ出したらよかったのよ。こんな人生なんて、唾を吐き捨てるようなもの！ペッ！ペッ！(地面に唾を吐き捨て、両手で頭を抱えて泣き出す)

アーダム親爺 (彼女の頭に手を差し伸べて) ああお前もこうして、もうどうにもならんことがあると、悟ったな。

ハワー姐さん あなたは私を愛していると思ったのに。でも騙されていたと分ったのよ。あなたはずっと私を打ちのめしているのよ。楽園への道筋を探すことを口実にして、私から逃げようというのでしょうか。私は、独り残されるのよ。この獣たちを恐れて。(手の甲で涙を拭く)

アーダム親爺 冗談だったんだよ。なあお前、お前は綺麗だよ！わしはお前が好きなんだ。

ハワー姐さん 私もあなたが好きよ。ジュブラーイール・パシャの前でも、私は一度言わなかったかしら？もしあなたがいなかったら、私はあまりの悲しみに壊れてしまったわ。

(日が暮れ始める。月が不吉な光を放ちながら、空の片隅から上ってくる。一頭の象が枝の間から頭をのぞかせて、吼える。アーダムとハワーは桑の樹の上に登り、ハワーはアーダムの腕のなかに身を投げ出す)

アーダム親爺 ここでの暮らしは、苦勞と奮闘ばかりだろうな。でも、単調で味気ない楽園の暮らしよりは、マシだよ。わしは楽園ではずっと息詰まる思いをしていた。食っては寝るという、無為の暮らしにはほどなく飽きてしまうさ。あの天使たちが、どうして楽園のなかでなぞ、暮らしているものか、わしにはわからん。

ハワー姐さん 私たちが楽園から追われたのは、特に良かったわ。少なくとも、ここには見張り番もいなくて、私たちだけで心安んじて、幸せに暮らせるわ。

アーダム親爺 お前の唇をおくれ。創造の真意はここにあるのさ。

(アーダムは顔をハワーに寄せて、固い接吻をする。ハワーも手を延べて、木の枝を自分の前に引き寄せると、二人は繁った葉の陰に隠れてしまう。)

(幕)

幕の向こうから、獣たちの吼える声が、少しずつ小さくなって消えて行く。